

目的；本研究は一般女子学生の家庭のトイレの現状と、その意識、思考を調査検討するものである。この研究は、住宅の構成材のモジュール的立場の一環として、行うものである。

方法；大阪市内の女子短大及び女子高校の学生を対象として、調査を実施し回答をえた。

調査時期は、昭和60年6月上旬から下旬で、回収率は各々79.4%と69.2%である。

結果；集計の結果、この対象では洋式、和式の使用実態は、半々の割合で使用されている。また、水洗か非水洗かの間では、水洗が約8割を示しており、水洗の優位を示している。また、トイレの暖房では、暖房をしている実例は、平均で2.8%、便座ヒーターを使っているのが平均で約20%である。便所内の床材料で何か最も理想的であるかの間では、陶器または、磁器タイルであり、またこれが理想的な材料と考えた理由は、美しさの価値と水で洗えるという判断である。トイレに関する意識は、観念として“掃除しやすく、衛生的な場所”にしたいが一番多い。従って相対的に、水洗が多いということは、大阪市内に居住しているためであると考えられる。洋式傾向を示しているということは、最近、水洗が普及し、また、一般的傾向としてタンク式が普及しておりこのことは、家庭のトイレが水洗浄式をマスターしたと考えられる。また、トイレに暖房が設置され始めているということは、家庭内全体を暖房しようとする徴候を示しているといえよう。また、トイレ観は、まだまだ、慣習的な認識が強く、トイレを、個室化する意識とか、他の空間と同じ空間であるという考え方に到達していないことがわかる。以上のことからこの調査の段階では、今のトイレの認識現状は、トイレの機能をまだ、充分認識的に完成しえていない。